

# (実践報告)こども学科における初年次教育の取り組み — 保幼小連携に着目して —

Efforts in First-Year Experiences at Department of Child Study  
— Focusing on the Cooperation between Early Childhood Education and Care and Elementary Schools —

直江 学 美 (人間科学部こども学科教授)

Manami NAOE (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Professor)

森 永 秀 典 (人間科学部こども学科准教授)

Hidenori MORINAGA (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Associate Professor)

三 好 伸 子 (人間科学部こども学科教授)

Nobuko MIYOSHI (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Professor)

佐 藤 静 恵 (人間科学部こども学科講師)

Shizue SATO (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Senior Lecturer)

島 倉 晴 信 (金沢星稜大学教職支援センター特任准教授)

Harunobu SHIMAKURA (Kanazawa Seiryō University Teacher Education Center,  
Specially Appointment Associate Professor)

福 田 美 月 (人間科学部こども学科助手)

Mizuki FUKUDA (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Assistant)

## 〈要旨〉

本稿では、金沢星稜大学人間科学部こども学科の初年次教育に位置づけられる基礎ゼミナール（以下、基礎ゼミとする）について報告する。

本こども学科は、保育者養成課程と小学校教員養成課程のいずれかの課程を受講する学生が主に在籍している。基礎ゼミは、これら異なる教育課程を履修する学生が集い、共に学修する初年次教育の場である。また、担当教員は、保育所等の保育経験者や、小学教員としての実務経験を有する者、小学校の校長経験者、芸術家など様々である。このように、異分野の専門家が基礎ゼミを担当することには、基礎ゼミに学際的な視点や学びがもたらされるという意義がある。また、小学校教員、保育者志望の学生が共に学修し、小学校での教員経験者、保育者としての実務経験を有する者がゼミを担当している点は、保幼小連携の架け橋としての役割を担うために不可欠な、子どもの見方や考え方を学ぶ機会になると思われる。

考察は今後行うこととし、まずは本稿にて金沢星稜大学人間科学部こども学科における初年次教育の取り組みを報告したい。

## 〈キーワード〉

初年次教育, 保幼小連携, 初等教育, 幼児教育, 保育

## 1 はじめに

本稿では、金沢星稜大学人間科学部こども学科（以下、基本的にこども学科とする）における初年次教育の取り組みを報告する。

こども学科は、保育者養成課程と小学校教員養成課程のいずれかの課程を受講する学生が主に在籍している。つまり、こども学科では、「こども」という大きな枠組みで、

保育および教育を担う人材を育成している。こども学科の、初年次教育に位置づけられる基礎ゼミナールは必修科目で複数の教員が担当する。基礎ゼミナールを担当する教員は、保育所等の保育経験者や小学校教員としての実務経験を有する者、小学校の校長経験者、芸術家と様々である。

基礎ゼミナール（以下、基礎ゼミとする）は、年間で

通して、ゼミ別で行う回と、1年生全員で行う回が設けられ、全員でゼミを行う回の担当教員は、教員の専門性に鑑みて決める。各回のテーマは、ミーティングにより担当教員全員と助手、つまり基礎ゼミに関わる者全員で協議し、その協議をもとにリーダーがシラバスを作成している。ミーティングで話し合われるのは各回の大きな内容までで、学びの内容や詳細は各担当教員が決める。

このように、異分野の専門家が基礎ゼミを担当し、内容を協議するということには、基礎ゼミに学際的な視点や学びがもたらされるという意義がある。また、保育者養成課程と小学校教員養成課程を履修する学生が集い、共に学修し、保育所等の保育経験者や小学校教員としての実務経験を有する者がゼミを担当している点は、保・幼・小の枠を超えた子どもの見方や考え方を学ぶ機会になると思われる。つまり、本基礎ゼミの在り方や取り組み、ひいては、こども学科の在り方が、現在課題となっている保幼小連携・接続問題解決への糸口になり得るのではないかと考える。

本稿の執筆分担は、主に担当した各回の講義テーマについて執筆し、こども学科の概要や背景は、こども学科の在職期間が長い直江学美が、基礎ゼミの概要は2022-2023年とリーダーとして基礎ゼミを率いてきた森永秀典が執筆することとした。

よって、「はじめに」「背景と目的」「おわりに」は直江が、「基礎ゼミの概要」「小学校見学」「保幼小連携の視点と基礎ゼミ」は森永が、「園見学」は三好伸子が、「遊びについて」は佐藤静恵が、「小学校見学の事前指導」は島倉晴信が、「ようこそ先輩」は福田美月が執筆する。

## 2 背景と目的

### 2-1 こども学科の概要

本節では、金沢星稜大学人間科学部こども学科の概要を示す。

こども学科は、2007（平成19）年に新設された。設置当初の収容定員は40人であったが、2014（平成26）年と2018（平成30）年に収容定員を増やし、現在は68人である。2024年7月時点で、1年生83人、2年生70人、3年生89人、4年生65人が在籍している。

こども学科では、小学校教諭一種免許状、幼稚園教諭一種免許状、保育士資格の取得が可能で、多くの学生が複数の免許取得を目指している。学生は、自身の免許取得に必要な科目を中心に科目履修をおこなっている。こども学科のカリキュラム・ポリシーにも、「教育科学と保育科学の領域を有機的に連携させ、小学校教諭一種免許状、幼稚園教諭一種免許状、保育士資格を取得する」ことができる旨が示されている。

本学科では、いつの頃からか小学校教員養成課程の学生と保育者養成課程の学生とを「小学校系」「幼保系」と区別し、以降現在までその区別を踏襲している。

基本的に1年生のほとんどが「小学校系」か「幼保系」であるが、年次が上がり、民間企業や公務員（行政）などを目指すことにした学生に対しては「一般系」が使われる。本稿でも、学科内の状況を伝えるために、一部で「小学校系」及び「幼保系」を使用することとする。

1年次の基礎ゼミでは「小学校系」「幼保系」の区別なくゼミに所属し、こどもについて広く学ぶ。2年次になると「小学校系」と「幼保系」に分かれたフィールド活動（ゼミ活動）を行い、2年次、3年次と学生各自の進路に基づき専門性を深める。4年次の「専門ゼミナール」では教育科学、保育科学などの各専門領域から追究し、個別の研究テーマにもとづいた研究を行い、「卒業研究報告書」にまとめ、卒業する。

学生の、卒業時の進路情報について次に示す。進路情報は、卒業時のゼミ担当教員がまとめたものを使用し、年度の新しいものから順に近年5か年分を記す。こども学科を卒業する学生の進路先は複数あるが、本稿は保幼小連携に着目するものであり、あえて「小学校教員」「幼稚園教諭、保育士、認定こども園保育教諭」「その他」の3つとした。なお、小学校教員の人数には教諭の他、常勤・非常勤講師も含め、（）内に常勤・非常勤講師の人数を記した。

#### 【2023年度卒業生（71人）】

小学校教員 28人（3人）  
幼稚園教諭，保育士，認定こども園保育教諭 22人  
その他 22人

#### 【2022年度卒業生（69人）】

小学校教員 35人（1人）  
幼稚園教諭，保育士，認定こども園保育教諭 17人  
その他 17人

#### 【2021年度卒業生（74人）】

小学校教員 34人（5人）  
幼稚園教諭，保育士，認定こども園保育教諭 23人  
その他17人

#### 【2020年度卒業生（71人）】

小学校教員 34人（4人）  
幼稚園教諭，保育士，認定こども園保育教諭 28人  
その他 9人

#### 【2019年度卒業生（62人）】

小学校教員 29人（6人）  
幼稚園教諭，保育士，認定こども園保育教諭 20人  
その他 13人

卒業時の進路情報をまとめる。近年5か年（2019-2023年度）の卒業生347人の進路は、小学校教員166人（46.1%）

幼稚園教諭, 保育士, 認定こども園保育教諭は110人(31.7%), 「その他」は77人(22.2%)である。

基礎ゼミは, これらを卒業後の進路とする学生が共に学修し, 大学4年間の学びに必要な基礎知識や能力を養う, 初年次教育として位置づけられている。

## 2-2 背景と目的

金沢星稜大学のこども学科の設置について俯瞰する。金沢星稜大学は1967(昭和42)年に金沢経済大学として設置され, 長らく経済学部のみ, いわゆる単科大学であった。こども学科が金沢星稜大学に設置されたのは2007(平成19)年で, 当初, 学科内で取得可能な免許状は, 小学校教諭一種免許状と幼稚園教諭一種免許状であった。

小学校教員養成の動向については, 岩田康之(2018)が歴史的な視点を踏まえ考察しているため, 岩田の報告を基にまとめる。

岩田によると「開放制」(国・公立・私立のいずれの大学でも, 教員免許取得に必要な所定の単位に係る科目を開設し, 学生に履修させることにより, 制度上等しく教員養成に携わることができる)は日本の教員養成における戦後の二大原則の一つであったが, 基本的に師範学校に独占されており, 過程認定制度の導入時にいわゆる一般大学で小学校教員養成に参画した私立大学は6校(立教・玉川・青山学院・日本女子・聖心女子・京都女子)にとどまるなど, 実態としての「開放制」の展開は遅れていたという。

しかし一方の旧師範学校を引き継いだ国立教員養成系大学・学部においても, 1980(昭和55)年以降ゼロ免課程を設けたり, 1998(平成10)年-2000(平成12)年の三年間に定員を15,000人から10,000人へ縮小する策が取られたりするなど教員養成分野における抑制策が取られた。結果, 「2005(平成17)年の段階において, 公立小学校の新規採用教員11,518名のうち教員養成系大学・学部出身者は5,285名(45.9%), 一般大学・学部出身者は5,124名(44.5%)とそのシェアは拮抗するに至っていた」という。

その2005年に, 「聖域なき構造改革」を謳う小泉純一郎内閣(2001-2006年)のもと, 中央教育審議会において, 教員分野における大学等の設置又は収容定員について, 「必要に応じて個別に検討を加えていく必要がある」と提言がなされ, 2005年度から, 教員養成分野における抑制策は撤廃された。岩田によると, この提言以降, 公私立の一般大学で小学校教員養成プログラムを新たに設けるところが急激に増加したという。本学こども学科が設置されたのもちょうどその頃(2007年)である。

岩田は, 2005年度と2016(平成28)年度の小学校教諭一種の課程認定を有する大学の比較において, 2004(平成16)年までに課程認定されたいわゆる「伝統的」大学と,

2005年以降に認定された「新規参入」大学を区別し, 新規参入のプロバイダの大半は私立大学であると述べている。岩田はさらに, 新規参入プロバイダのうち「約4割(53校)が, 学士課程を設置してから20年以下の, 大学としての歴史の比較的浅い高等機関である」と指摘している。本学は1967年に設置されているため, 岩田がいう「大学としての歴史の比較的浅い高等機関」にはあたらないが, 新規参入のプロバイダは, 旧の師範学校を主な母体とする国立大学が「例外なく大学院修士課程を持ち, 小学校教員を大学院レベルで育成する体制を整えているのと対照をなす」と問題点を指摘する。

また, こども学科設置の前年, 2006(平成18)年に出された中央教育審議会の答申(文部科学省2006)は, (国立に限定されることなく)課程認定大学一般の問題としての教職課程の改革, 教職大学院創設, 教員免許更新制の導入が求められるというものであった。本学こども学科は, これら教職課程や制度に大きな変化があった頃に設置されたといえる。

こども学科が設置された2007年から現在(2024年)までの間に, 教員免許更新制度はなくなり(2021年度が最後の更新講習となった), GIGAスクール構想が加速するなど教育を取り巻く状況は急速に変化している。また, 「令和の最も大きな教育課題は, 教員になりたい学生が減少している」と指摘する研究者もいる(八木2023)など, 教員志望の学生を取り巻く状況も変化した。

小学校教員養成に話が大きく膨らんだが, 保育者養成についても言及したい。

こども学科では, 2007年の新設当初は幼稚園教諭一種免許状のみ取得可能であったが, 2014(平成26)年に, 指定保育士養成施設に認定され, 2015(平成27)年に保育士養成課程を開設してからは幼稚園教諭一種免許状と保育士資格両方の取得が可能である。

保育者養成の動向については, 坂田(2022)の『幼児教育の政策動向と教員養成(保育者養成)の課題』を基に次にまとめる。

我が国において, 就学前段階の幼児教育(近年は「幼児教育・保育」という記述が一般的ではあるが, 坂田は論文の中で「幼児教育」としているため, ここでもそれに従う)を行う施設は, 主として3種類に分かれており, それぞれ「幼稚園」「保育所」「認定こども園」である。現行の「幼児教育施設において『有資格者』と見做されるのは, 幼稚園教諭免許または保育士資格, あるいはこの両方を有すること」であり, 認定こども園においては保育教諭が配置されることになっているが, この保育教諭は呼称のみで対応する免許・資格は現時点では存在せず, その代替として, 幼稚園教諭免許並びに保育士資格の両方を保持することが

求められている（坂田2023）。2015（平成27）年にこども学科に、保育士養成課程を開設したのも、この流れを受けての対応であろう。

坂田は続けて、「さらに2015（平成27）年に関係法令が整備されて以来、2022（令和4）年現在は経過措置としていずれか片方の資格または免許を保持することによって保育教諭としての勤務が可能な状態」であり、「これらのことを背景として、幼稚園あるいは保育所に従事する者という区別をせず、一般的に幼児教育段階に携わる有資格者を『保育者』と称するようになってきている」と説明している。

幼保一元化や幼児教育にまつわる制度改革についても、同じく坂田の論文を基にまとめる。2001（平成13）年から2004（平成16）年に設置された「総合規制改革会議への答申『規制改革のためのアクションプラン』」において、幼保一元化が具体的に答申され、その後認定こども園への設置へとつながった。しかし坂田は「幼稚園・保育所の機能を廃止し、一元化された機能への代替とまでは至らず、幼稚園と保育所を管轄する文部科学省と厚生労働省が相互に連携しながら幼児教育施設を司るという方向性で今日まで至っている」と述べる。2021（令和3）年に可決された法案に基づく「子ども庁設置」の際にも、幼保一元化の動き（所管事務所の統一化）が検討されていたが、子ども庁には、厚生労働省から保育所に関する事務が移管され、内閣府から幼保連携型認定こども園に関する事務が子ども庁へ移管されることにより、この2つについては一元化がなされた。しかし、幼稚園の所管事務は移されることなく文部科学省に残ることとなった（坂田2022）。（なお、こども庁として検討されていた新省庁は、2023年4月にこども家庭庁の名称で新設された）。

ここまで、こども学科が関係する小学校教員養成及び保育者養成について、そのほんの一部ではあるが、近年の動向や背景を概観した。2005年以降に認定された「新規参入」大学について「例外なく大学院修士課程を持ち、小学校教員を大学院レベルで育成する体制を整えているのと対照をなす」との問題点の指摘もみられた。

小学校教員養成と保育者養成は、それぞれの歴史的な背景や管轄する官庁や行政も異なる。こども学科では「幼保系」とひとくくりしているが、その幼保の一元化でさえも、「幼稚園・保育所の機能を廃止し、一元化された機能への代替とまでは至らず、幼稚園と保育所を管轄する文部科学省と厚生労働省が相互に連携しながら幼児教育施設を司るという方向性で今日まで至っている」状況にある。さらに、「小学校系」をもこども学科は含んでいる。

加えて、こども学科の学生の進路も、近年5年の卒業生では46.1%が小学校教員に、31.7%が保育者に、22.2%が

民間企業や児童福祉施設の職員や公務員（行政）と、幅広い。

基礎ゼミは、「こども」という大きな枠組みをもつこども学科の、取得免許や資格、そして進路先が異なる学生に対する初年次教育を担っていることを今一度押さえたい。

次章では、「教育科学と保育科学の領域を有機的に連携させ、小学校教諭一種免許状、幼稚園教諭一種免許状、保育士資格を取得する」こども学科の、初年次教育に位置付けられている基礎ゼミの概要及び実践報告を行う。

### 3 基礎ゼミの概要

#### 3-1 基礎ゼミにおける学びの概要

本基礎ゼミは、こども学科の初年次教育に位置づけられており、大学での学びの基礎となる資質の醸成を目的としている。2020（令和2）年度の基礎ゼミ担当者によって、2020年度に実施した基礎ゼミの活動を基に、学びの内容を整理し、具体的なイメージ図を作成した。そのイメージ図を2024年度版として修正したものが、図1「基礎ゼミの学びのアプローチ」である。

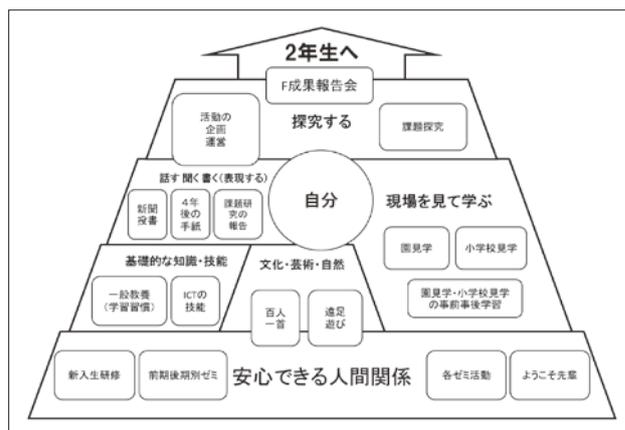


図1 基礎ゼミの学びのアプローチ

本基礎ゼミでは、通年の学びの土台として、「安心できる人間関係」を設定している。4月上旬には、「新入生研修」を実施し、宿泊を伴う活動を通して、学科としての学びや各講義内容についての理解を深め、時間制作や人間関係の構築を目指したプログラム等により、入学直後の不安を低減する取り組みを行っている。また、「遊び」や「遠足」、「百人一首」、「ようこそ先輩」等の実施を通して、「安心できる人間関係」の構築を目指している。さらに、基礎ゼミに所属する学生を5つのゼミに分け、ゼミ毎に各ゼミ担当教員の専門性に基づいた活動を行ったり、前期と後期に5つのゼミのメンバー構成を入れ替えたりすることで、多様な学生及び教員との関わりをもつことのできる機会を設定している。2024年度は、前期4コマ、後期3コマを各ゼミの時間とした。各ゼミでの活動を通じて、きめ細やかな指導と支援が可能になると思われる。

「安心できる人間関係」を土台として、「現場をみて学ぶ」園見学や小学校見学、「文化・芸術・自然」に触れることを目指した「遊び」や「遠足」、「百人一首大会」、「基礎的な知識・技能」の習得として、一般教養を確認する小テストの実施やICT(ロイロノート)の活用促進に取り組んでいる。また、「話す・聞く・書く」(表現する)の基本的な技能向上を目指し、新聞記者を招いての講話を聞いたり、4年後の自分に対して手紙を書いたりする活動等を取り入れている。このような活動を積み重ねながら、課題研究及び各活動の企画・運営等を通して「探究する」基礎を養うことで、本学科の2年次への活動につなげていくことを目指している。

### 3-2 シラバスと年間計画

2024(令和6)年度の基礎ゼミのシラバスと年間計画の概要は以下の通りである。

表1. 2024年度こども学科基礎ゼミのシラバスと年間計画のテーマ及び概要(★は各ゼミに分かれての活動)

回	基礎ゼミⅠ(前期) テーマ・概要	回	基礎ゼミⅡ(後期) テーマ・概要
1	新入生研修/学科としての学びを理解し、今後の学生生活の見通しをもつ	1	遠足の準備/遠足の行程や留意点を知り、遠足についての見通しをもつ
2	学内の施設及び授業履修の留意点/今後の学生生活の見通しをもつ	2	★各ゼミの課題/ゼミ担当教員の専門性を基にした課題に取り組む
3	遊び/遊びを通して、こどもにとっての遊びの意義について考える	3	ようこそ先輩②/先輩学生との対話を通して、今後のキャリアについて考える
4	★大学での学び/ゼミ担当教員の専門性を基に、大学で学ぶことについて考える	4	遠足/遠足の企画・運営を通して、活動の留意点やレクリエーションの意義について考える
5	新聞活用講座/書くことの意義について理解を深める	5	
6	★レポートの書き方/ゼミ担当教員の専門性を基にレポートを書くことについて考える	6	★各ゼミの課題/ゼミ担当教員の専門性を基にした課題に取り組む
7	ようこそ先輩/先輩学生との対話を通して、今後のキャリアについて考える	7	百人一首大会/日本の文化のよさについて考え、学生間の交流を深める
8	4年後の自分への手紙/4年先を見据えながら今後のキャリアについて考える	8	百人一首大会/日本の文化のよさについて考え、学生間の交流を深める
9	課題研究①/ゼミ担当教員の研究の概要を知り、研究についての理解を深める	9	園見学事前指導/園見学を効果的に学ぶための準備を行う
10	小学校見学事前指導/見学する際の留意点及び、小学校教師の仕事について理解を深める	10	園見学/園見学を行い、園の現場を知る
11	小学校見学/小学校見学を行い、小学校の現場を知る	11	園見学事後指導/園見学におけるお互いの学びを振り返る

12	小学校見学事後指導/小学校見学におけるお互いの学びを振り返る	12	基礎ゼミF成果報告会/こども学科2年生の各ゼミ活動の報告を聞くことを通して、次年度の活動の見直しをもつ
13	★課題研究②/ゼミ担当者の専門性を基に研究への理解を深める	13	
14	★課題研究③/ゼミ担当者の専門性を基に研究への理解を深める	14	総合テスト/基礎的な知識の確認と前期の学びの振り返りをする
15	総合テスト/基礎的な知識の確認と前期の学びの振り返りをする	15	基礎ゼミの振り返り/これまでの活動の振り返りを行い、次年度への見直しをもつ

基礎ゼミのシラバス及び年間計画は、後期終了後に、その年度の基礎ゼミ担当教員全員で検討会を開き、見直しを行っている。2023(令和5)年度の検討会では、各ゼミ活動の適切な回数や、園見学及び小学校見学の実施日について検討した。また、各活動についての改善点を出し合ったり、教育的意義の確認をしたりすることで、基礎ゼミの活動内容を精査した。各活動の学びの効果を最大化するために、学生に対する丁寧なフィードバックの必要性について共通理解がなされる等、具体的な活動内容だけでなく、活動に対する見方や考え方についても共有する場が設けられている。

### 3-3 実践報告

#### 3-3-1 園見学

園見学の目的は、こども学を学び初めの新鮮な肌感覚をもつ1年生が、直接乳幼児と触れ合って遊び、保育所等の保育の実際を感覚的に理解することである。対象となる保育所等は、本目的を説明して依頼し、快諾を得た保育所等である。その種別は、金沢星稜大学附属幼稚園2園を中心として、その他の認定こども園、保育園、幼稚園、公立保育所等である。本稿では全て園と記す。見学の方法は、園に学生を10人程度のグループに分けて、教員が分担して引率する。さらに園ではクラスに数人ずつ分かれて、乳幼児の負担にならないように留意して見学する。訪問する園への距離により、徒歩か大学バスで移動して、現地で約40分～60分間乳幼児と遊んだり、見学したりする。

園見学の回数は、2019年度から2023年度までは、前期1回、後期1回の年間2回行い、園の保育方法の違いや、学生自身の子どもの関わり方を比較して学習できるように構成した。2024年度は、学習成果の検討と年間計画を見直して後期1回とする。

2020年度の園見学は、記録に残しておきたい。COVID-19感染症の流行により多数の学生の訪問が叶わなかったため、2名の教員だけが園に入り、乳幼児と保育者の様子をZoomなどの遠隔操作で学内にいる学生らに送った。非常

時であったが学生の学びのために受け入れを行う園に感謝すると共に、教員間の連携が確認された園見学となった。

次に園見学の前週の事前指導について述べる。2023年度までは、フィールドで学ぶ初めの一步としての姿勢を学習してきた(2024年度は、見学先のスケジュール等に鑑みて、小学校見学を最初の見学とした)。園見学が行われる6月頃の学生は、大学入学当初の自由な色の髪染めを楽しみ始めた時期であり、身だしなみを含む学習態度をていねいに学ぶ必要がある。教員集団で、髪色の指導方法に関して、「厳しく明確に指導するべき」、「学生自身の気づきが大切」、「失敗する経験をさせたい」などと各自の専門に引き寄せて意見交換を行ってきた。2021年度には、「園の就職条件としての髪色は、〇〇カラーが推奨される」等の数値基準や外部情報を伝え、学生の一部に教員の基準で承認される意識を与えてしまった。「先生、この髪色はいいですか?」という質問は、国家資格を目指す学習としてふさわしくないと気づかされた。そこで2022年度からは、「子どもの最善の利益」を目指す保育の思想を伝え、学生が自ら考えて行動する姿勢への支援を基本としている。

園見学の翌週は事後指導を行う。グループで異なる園の様子や、気づきや学びを共有する。その際共有した気づきや学びは、協力園に写真付き記録として届けている。園からは、「積極的で明るい学生である」、「子どもが遠慮なく体当たりして触れ合っていた」、「振り返りの記述を読んで」「1年生の記録力に驚いた」などとおおむね好評な意見が寄せられている。



写真1.「子どもに囲まれる体験」(筆者撮影)

園見学についての学生の声として、本項では、2023年度の総合テストの選択問題③の回答から2つの記述を引用する。問題は(①②は略)、③「基礎ゼミIでは、こども園見学に行きました。各自の志望職種(幼稚園教諭、保育士、保育教諭、小学校教諭など)に関係なく、全員がこども園見学を行うことには、どのような意味があるか考えるか書きなさい」である。

保育者を目指す学生(A)は、「保育環境や子どもへの接し方などをもっと学びたい」と記述し、小学校教諭を目

指す学生(B)は、「1歳児がパズルをする、ボール遊びやままごとを積極的にする等の姿を見て、小学校児童の土台にいろいろなタイプの保育所等の経験があると思う」と記述した。学生にとっての園見学の一効果として、直接的な乳幼児との関わりが印象に残り、学習意欲を高め、学童期までの発達のつながりへの気づきが得られることが挙げられよう。

近隣園の協力により成り立つ園見学は、教員らに乳幼児と学生の姿を信頼して見守る姿勢と、幅広い保幼小連携の視点を与えていると予測され、教員間での議論を深めたい。

### 3-3-2 小学校見学の事前指導

2024年度の入学当初に行ったアンケートによると、新入生82名中54名(約66%)が「小学校系」を志望し、22名(約27%)が「幼保系」を志望している。残りの6名(約7%)の学生は、進路についてまだ決めかねているか、他の職業を考えている状況であった(2024年4月3日:学科別ガイダンスで調査)。つまり、こども学科は、2024年度は教職を志して入学してきた学生が多いといえるが、おおむね、どの年度も、教職を志す学生の割合が高い。

この志を大切にし、4年間で教員としての資質・能力を育成することは非常に重要である。学生は、入学時のオリエンテーション、新入生宿泊研修、こども学総論、基礎ゼミ等を通じて学修を進め、自身の大学での学びを俯瞰しイメージしている。

本項では、その中でも特に基礎ゼミIの「小学校見学事前指導」の回について述べる。

「小学校見学事前指導」の構成は、①今の自分、4年後の自分②先生という職の魅力③見学に行く小学校について知ろう(金沢市立Y小学校)④まとめ⑤動画視聴(金沢市立Y小学校の朝の子どもの様子)とした。

以下、授業の大まかな流れに沿って説明する。

①今の自分、4年後の自分:4年間の教職に関する学びを概観した(図2)。その上で、現時点での初志「なりたい先生像(目標とする先生像)」をロイロノートに回答させた。

この時期に目標像をもつことは、自己成長のための指針となるだけでなく、日々の実践や活動において自己を振り返る基準にもなる。また、今後、初志の自分を振り返ることで、目標像がどのように変化してきたかを理解することも重要である。4年間の学びや経験を通じて、この変化を意識することは、自分自身の成長を実感し、未来の目標に向かってのモチベーションを高める助けとなると考えている。



図2. 4年間の教職に関する学びの概観

②先生という職の魅力：筆者の学校現場での経験や一般的に言われている教職の魅力を伝え、学生の意欲を高めることを目的として講話を行った。

③見学に行く小学校について知ろう（金沢市立Y小学校）：見学に行く小学校の情報を学生に提供するため、事前に見学校の校長先生からいただいた内容を基に説明を行った。提供する内容は、「教育目標」「学校の日」「児童数」「学校の歴史」「学校の重点」「本学との関わり」である。これらの情報は、見学先の小学校が作成したプレゼンテーションを通して学生に伝えた。

④まとめ：白井（2020）を基に、学生には、ラーニング・コンパスの概念を説明し、AARサイクルのAnticipation（見通し）、Action（行動・実行）、Reflection（振り返り）のいずれから始めても良いことを強調した。

白井は、ラーニング・コンパスに位置づけられているAARサイクルは、教師が行う授業上の工夫でなく、生徒に求められるコンピテンシーを育てていくのに必要なプロセスとして捉えられている。生徒が生涯にわたってコンピテンシーを獲得していくためには、そのために学習方略を身に付ける必要があり、AARサイクルは、その基本となる学習プロセスとして位置づけられている。と述べている。

この考えを基に、2024年度は小学校見学が初めての現場見学であるため、小学校見学が「せんせい」への最初の一歩であることを確認し、AARのどこに自分をおいて最初の一歩を踏み出すかを考える場面を設けた。これは、メタ認知的な視点から自分の現在の立ち位置を見直し、次のステップを意識するための重要な機会と考えたからである。

⑤動画視聴：学生への説明では「雑誌やお菓子の付録とは、実は一番の楽しみでもある」と言う言葉を用い、「おまけ」と称して見学先となる金沢市立Y小学校の朝の子どもの様子を動画で見せた。「おまけ」という言葉がもつワクワク感や遊びの要素を取り入れ、見学への興味喚起及び意識づけを行った。授業後の振り返りでは、「子どもたちの様子を見て学校見学へのモチベーションが上がった」「楽しみのになった」などといった声が多く記され、この動画によって見学への意欲が高まったことがわかった。

以上が、本年度の実践「小学校見学事前指導」についての報告である。今後、教職を志して入学した学生が、1年次から教育現場を知り、見学という体験をすることには、どのような意義があるのかについて、事後の振り返りや学年が進むごとに意識調査を行い、比較検討していく予定である。

### 3-3-3 小学校見学

基礎ゼミでは、2017年度以降、公立小学校の授業見学を実施している。朝の会から1限目の授業見学を通して、現在の小学校教育の実際を知ることが目的としている。

**小学校見学** ①授業見学を実施する小学校に集合し、②1階フロアで教室配置を確認、③見学を希望する教室を決定し、④授業見学を実施する、という流れで進めている。見学可能な教室を3教室までに限定し、教室内で起こっている出来事について、余裕をもって見学できるようにしている。小学校見学の事前指導で得た見学の視点を基に、児童や教師の姿から、新たな気づきを得られるように促している。

**小学校見学振り返り** 小学校見学の振り返りとして、見学で得た学びをグループ間で交流し、交流して得られた内容を整理する活動を行っている。整理された内容の例は、以下の通りである（図3）。図3を作成した学生グループは、学年ごとに教師の指示の仕方をまとめたり、児童の取り組み方の違いについて整理したりしていた。また、掲示物にも関心をもち、掲示物の特徴についてイラストを用いて整理していた。

基礎ゼミの学生にとっては、大学入学後初めての小学校見学であり、大学での学びがどのように学校現場に活かされているかについて、理解を深めるきっかけになると思われる。



図3. 小学校見学の振り返りのまとめ例

また、これまでは学校教育を児童の目線で捉えていたところから、教師の目線で捉え直すことを通して、働く場と

しての理解を深めることにつながると思われる。さらに、こども学科の学生は、小学校教員を志望する学生だけでなく、保育者を目指す学生も含まれている。保育者を目指す学生から見た小学校教育についての考えを交流することで、小学校教育や保育、幼稚園教育についての理解も深まると思われる。

### 3-3-4 遊びについて

遊びを通じた表現・創作活動はこどもの発達段階にとって多大な役割を担っており、人が人らしく、生涯にわたり文化的で豊かな生活を送るための基盤となる。筆者の専門はガラス造形・工芸であり、本学科の教育プログラムとは直接的な関連をもたない。しかし、自らの作家活動を教育活動へと還元してきた経験と、こうした造形教育の意義を通じて、指導者としての多様な有り方の一例を提案することができるのではないかと考えている。在学中の4年間、一貫して、小学校教諭、保育者を志す学生がほとんどの中、彼らの目指す目標を尊重しつつ、どのように文化的見識を広げる大切さに気付いてもらうのか重要な課題である。こどもたち一人一人の個性を伸ばすことができる教育者としての資質が身に付けられるよう、筆者が留意した点について本節で述べていきたい。

授業の大まかな流れは以下の通りである。先ず導入として、作品と筆者の研究活動についてスライド発表を行った。その後、松田恵示が執筆した記事『なぜ私たちは遊ぶの?』(1)を紹介した。最後に授業のまとめとして、学生が演習課題「お絵描きしりとり」「紋切遊び」に取り組み作品制作を行った。

授業冒頭に筆者の作品紹介を取り入れた理由として、アート分野における高度な専門性に触れさせる目的があった。小学校教諭を目指す学生の中には、教員採用試験に必要な学習にのみ注力する者も少なくない。しかしながら、実用的な目的と純粋な学びの横断によってこそ、複雑化した社会の問題に対し多角的に捉えられる総合力が身に付けられると考える。このようなりべラルアーツの観点から見ても、教える側が教養を磨き質の高い学びを提供できれば、子どもたちの創造性と思考力を育む一助となる。本授業での取り組みが、芸術に明るい人材を未来の教育現場に一人でも多く輩出していくことに繋がり、延いては地域の文化振興とその発展へと寄与することを期待する。

次に『なぜ私たちは遊ぶの?』の記事の紹介を通じ、文化人類学的側面から見て「遊び」がもつ重要性に気付かせることを狙いとした。松田は同書の中で、遊びが人間にとって根源的な活動であり、長い歴史の中で文化そのものを醸成させてきたと述べている。遊びを通じた身体活動、そこから得られた様々な学びや発見の蓄積によって、現行の

社会が形作られてきたと言っても過言ではない。このような考えを実際の教育活動へと応用し、人の営みや生きることについて、深く思考する教育者を目指してほしいと考える。

演習課題「お絵描きしりとり」「紋切遊び」は、実際に筆者が教員時代に学校現場で実施していたワークである。これらは準備に時間と手間がかからないので、教員も気軽に取り組むことができる。更に、学校行事やホームルーム、総合的な学習の時間などの他教科への応用が利く利点がある。「お絵描きしりとり」は、20秒/人の時間内でイラストを完成させる。次の人は前の人が描いた答えを推測し、再び20秒でイラストで解答する。また、「紋切遊び」は折り紙に折り目を付け、テンプレートに合わせてハサミで図案を切り抜く、日本の古典的な造形・デザイン手法である。代表的なモチーフには、雪の結晶(三ツ折)や蝶(一ツ折)などがあるが、本授業ではサクラ(五ツ折)を制作した。1回目は練習、2回目は応用として各自オリジナルのサクラを制作した。

担当授業回「遊びについて」について、どのような成果と今後の課題が見えてきたのか、過去2回の試みのみで判断することは難しい。今後も地道な取り組みを継続しながら、学生が教育における芸術・造形活動の重要性に気付くことで、広い視野がもてるよう促していきたい。

### 3-3-5 ようこそ先輩

基礎ゼミでは、前期がスタートし、しばらくした頃(2024年度は5月24日)に、1年生が先輩から直接話を聞ける機会を設けている。先輩を基礎ゼミに招くという意味合いから「ようこそ先輩」と題し、入学して間もない1年生が、授業や実習、アルバイト等大学生活で不安に思っていることや知りたいことを先輩から直接聞く。1年生にとって、「ようこそ先輩」での先輩との交流は、大学生活の不安解消のためだけではなく、今後のキャリアについて考える機会となることも目的としている。

筆者は、現在はこども学科の助手として基礎ゼミに関わっているが、自身も本学こども学科の卒業生であり、学生時代の不安などもまだよく覚えている。本項では、卒業生であり助手でもある立場から「ようこそ先輩」について報告する。

「ようこそ先輩」では、小学校系グループと幼保系グループに分かれ、自己紹介後は1年生と4年生が自由に話し合う型式としている。一人一人が質問できるようにグループの人数はそれぞれ1年生5~8人、4年生2人と少人数にしている。時間は1回30分程度とし、様々な先輩と交流できるようにメンバーを変えて2回行う。

1年生は慣れない大学生活に戸惑ったり、今後どのよう

に実習や資格取得をしていくのかについて見通しがもてず不安になったりする学生も多い。よって、同じ学科の先輩の体験談やアドバイスを聞くことを通して、今後の大学生活をどう過ごしていきたいか考え、見通しをもって意欲的に学習に取り組んだり、安心して様々な活動をしたりしていくことにつながっていくことが期待できる。

今年度の「ようこそ先輩」を終えての学生の感想では「自分が今後どのように大学生活を送るのか不安だったが、明確になり安心した」「先輩の話を聞いて実習が楽しみになった」「英検やTOEIC、Wordの資格などをとっておくと後々ためになるということも学び、様々なことに挑戦していきたい」と述べられていた。1年生の意見からは、先輩の話を聞いて安心感や期待感をもったり、意欲が向上したりしていることがわかる。

また、1年生と4年生との交流は、縦のつながりや憧れの気持ちをもつきっかけとなることも考えられる。5月の末といえば、4年生は教育実習や保育実習を終え、教員採用試験や就職活動に取り組んでいる時期である。すでに実習を経験した4年生からは、笑顔で温かい雰囲気をつくったり、1年生の不安な思いに共感したり、丁寧に受け止め、寄り添ったりする姿が見られた。学生の感想にも、「本当の先生のような話し方をしていてすごいと思った」「先輩のようになれるよう頑張りたい」と述べられており、憧れの気持ちから4年生の姿を目標にしていることがわかる。

助手としては、1年生が安心して話したり質問したりできるように、各グループの様子を見回りながら4年生と一緒に1年生の不安を聞いて共感したり、自分の経験を話したりした。学生に近い立場の助手の存在は、「ようこそ先輩」の場では、学生にとってより「先輩」のように感じるのではないだろうか。学生がいつでも頼ったり、安心したりできる存在であるように、「先輩」のような目線で一緒に悩み考えたり、寄り添ったり、助言したりしながら、学生に近い存在であることが助手の役割として重要なのではないかと考える。そして、基礎ゼミの学びの土台である「安心できる人間関係」の構築へとつなげていきたい。

## 4 保幼小連携の視点と基礎ゼミ

### 4-1 保幼小連携の架け橋となる人材の育成に向けて

本基礎ゼミは、主に保育者養成課程と小学校教員養成課程のいずれかの課程を受講する学生が共に集う場である。異なる教育課程を履修する学生が、「遊び」や「先輩との交流」、「小学校見学」や「園見学」等の体験を通して、感じたことや考えたことを相互に交流することで、保幼小連携に関連する新たな気づきを得られる可能性がある。小見(2015)は、保幼小連携を取り巻く現代的課題の一つに「相

互理解・交流」を挙げており、「保幼小連携事業は異文化交流である」ことの認識をもつ必要性があることを指摘している。さらに、保育者養成段階において、小学校の話しを聞く機会をもつことが、保幼小間の相互理解を促進する可能性を述べており、養成段階の保幼小間の積極的な交流が、「相互理解・交流」の課題の解消につながると思われる。また、藤岡(2011)は、保育者と教師のもつ教育観や子ども観、発達観等の違いが、子どもにとっての「段差」になっている可能性を指摘している。保育者と教師のもつ教育観の違いによって生じている「段差」を養成段階から認識することで、子どもが感じる「段差」の緩和に向けた意識が醸成されると思われる。

中央教育審議会(2023)「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について」では、幼児教育と小学校教育の円滑な接続を図るため、5歳児から小学校1年生の2年間を「架け橋期」と称し、「架け橋期」の教育の充実と、生涯にわたる学びや生活の基盤をつくることの重要性が提言されている。また、「架け橋期」の教育の充実を通して、小学校入学当初の子どもが、小学校での学習や生活を楽しいと感じ、小学校を自分の居場所として認識できるようにしていくことが目指されている。このような「架け橋期」の教育の充実には、架け橋となる役割をもつ保育者及び小学校教員の養成が求められるであろう。本学科の基礎ゼミの活動は、保育者養成課程で学ぶ学生と小学校教員養成課程で学ぶ学生の相互理解を促す場となっており、保幼小連携の架け橋としての役割を担うために不可欠な、子どもの見方や考え方を学ぶ機会になると思われる。

以上のような、本学科の基礎ゼミがもつ教育的意義について、学生と教員が共通の認識をもちながら教育活動に取り組んでいくことで、今後の保幼小連携の架け橋となる人材の育成に寄与することが可能になると思われる。

## 5 おわりに

本稿では、金沢星稜大学人間科学部こども学科における初年次教育の取り組みを、保幼小連携に着目し、報告した。

執筆の構想段階では、これまで行ってきた基礎ゼミの取り組みを各担当教員がまとめ、報告が出来ればよしとしていた。しかし、執筆過程において、保育所等の保育経験者や小学校教員としての実務経験を有する者、小学校の校長経験者、芸術家や助手、それぞれの見地からの思いがけない指摘や質問があり、細かな擦り合わせや協議が幾度となく必要となった。そして、その都度、教員間の相互理解が深まっていくのを感じた。

また、本基礎ゼミは、主に保育者養成課程と小学校教員養成課程のいずれかの課程を受講する学生が共に集う場で

ある。異なる教育課程を履修する学生が、基礎ゼミにおいて、「遊び」や「先輩との交流」、「小学校見学」や「園見学」等の体験を通して、感じたことや考えたことを相互に交流することも、相互理解につながる。

小見（2015）は、保幼小連携を取り巻く現代的課題の一つに「相互理解・交流」を挙げ、「保幼小連携事業は異文化交流である」ことの認識をもつ必要性があることを指摘している。

つまり、こども学科における基礎ゼミの在り方や取り組みが「異文化交流」であり、常に「相互理解」を促す側面をもつといえる。この、本基礎ゼミがもつ教育的意義について、学生と教員が共通の認識をもちながら教育活動に取り組むことは大切であろう。また、本稿によって、基礎ゼミの取り組みが、現在課題となっている保幼小連携・接続問題解決への糸口になり得る可能性もみえてきた。これらの考察を、今後の課題としたい。

## 注

- (1) 松田恵示「なぜ私たちは遊ぶの？遊びの根源を探る。」  
[https://fin.miraiteiban.jp/asobi\\_roots/](https://fin.miraiteiban.jp/asobi_roots/)

## 引用および参考文献

- 岩田康之（2018）『『開放制』原則下の規制緩和と教員養成の構造変容（1）—2005年抑制策撤廃後の小学校教員養成の動向と課題—『教員養成カリキュラム開発研究センター研究年報』（東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター）第17巻，49-56頁。
- 小見のぞみ（2015）「保育者養成課程における『保幼小連携』の学びと課題」『聖和短期大学紀要』1，17-26頁。
- 坂田哲人（2022）「幼児教育の政策動向と教員養成（保育者養成）の課題」『日本教師教育学会年報』（日本教師教育学会年報編集委員会）第31号，64-74頁。
- 白井俊（2020）『OECD Education 2030プロジェクトが描く教育の未来エージェンシー，資質・能力とカリキュラム』（ミネルヴァ書房）
- 中央教育審議会（2023）「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について—幼保小の協働による架け橋期の教育の充実—」（審議まとめ）。
- 長尾彰夫（2013）「教師教育改革のポリティクス分析：教員養成大学の在り方を通して」『教育学研究』（日本教育学会）第80巻第4号，427-438頁。
- 藤岡久美子（2011）「幼稚園・保育所と小学校の「段差」をめぐって」『山形大学大学院教育実践研究科年報』2，31-38頁。
- 文部科学省（2006）「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」（中央教育審議会答申）。
- 八木成和（2023）「教員養成教育とのかかわりで」『令和の教育課題 学制150年を踏まえて（教育フォーラム71）』（日本人間教育学会編，金子書房），161-172頁。